
誰が為に剣を振る

春秋日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が為に剣を振る

【Nコード】

N4248F

【作者名】

春秋日和

【あらすじ】

心が読めてしまうハンター「アッシュ」は、辺境の村に赴任し、その村の発展に貢献する。自分の能力を忘れてしまうほどに、人々の心は穏やかだった。しかし、全ては無常である。この円満な日々にも亀裂が生じ始めた…。この物語は次の物語へと繋がる土台となる為、時間が省略される箇所が出てきます。

第零話・プロローグ

アッシュが赴任した村は、東に海を臨み、残り三方向を多くの火山に囲まれた、辺境の小さな村だった。

町へ行くためには、北の山と山の間にある谷とでも言うべき道を通るしかない。

アッシュが来た時は、寂れた静かな村だった。

アッシュには、他のハンターにはない特殊な能力があった。

それは

「心が読めてしまう」という能力である。

自分自身が望む望まない如何に関わらず、心の言葉はアッシュに流れ込んでくる。

この寂れた村は、人の心も穏やかで、アッシュにとって、とても暮らしやすい村だった。

もちろん、四方を大自然に囲まれた村であるから、物資に困らない代わりに、度々モンスターによる襲撃を受けていた。

村人たちは、抗わず村の外れにある鉄製のシェルターに避難をするのみだった。

村はモンスターに好きなように荒らされるばかりで、発展する気配はなかった。誰もが発展を願っていたが、誰もが諦めていた。

そんな折り、ハンターとしてアッシュがやってきた。アッシュは、襲撃してくるモンスターを討伐し、更に村人には自衛の訓練を行なっていた。

「皆で皆を守ろう！皆でよくしていこう！」

この言葉は村人達の心に刻まれ、村は発展し始めた。

村が発展し始めるが、この村には、村長というものがいなかった。村人たちは当然の如く、アッシュに村長となるようお願いでた。

アッシュにしてみれば、自分は一人のハンターでしかなく、自分に人をまとめていく力はないと思っていたが、何度も頼みに来る村人たちに押し切られ

「リーダー」という名称で、村長になるべき人物が現れるまで、暫定的に村長の役割を担うことになった。

村の発展は順風満帆。

北の道を通り、村の発展を聞き付けた行商人や、その村にいるハンターを見ようとやってくるハンターもいた。

そのほとんどは、アッシュに会った時、心を見透かすかのような（アッシュにしてみれば、見透かしてしまっている）話し方に感銘を受け、村に居残った。

そうこうしている内に、ギルドの支部も配置され、酒屋兼ギルドの建物も建設され、人も村とは言えないほど多くなってきた。

まだその時は、アッシュを中心に、村をあげて飲み、歌うという円満な生活が送られていた。

アッシュも、自分の特殊な能力を忘れるほどに、皆、本心から仲が良かった。

しかし、無情にも時は動き出す。

第一話・始まり

俺の名前はアッシュ、職業はハンターだ。

小高い所にある自分の家の窓から、村を見渡す。

俺がこの村に来た時は、まだ【辺境】と言われる村だった。今では【秘境】とまで言われるようになったらしい。

まったくこの村の人々の向上心には舌を巻く。

ほんのちよつと背中を押したら、皆でドンドン走っていく。そんな感じた。

一応は『リーダー』ということになっている俺だが、最早そんな肩書きはないも同然。皆、仲良く協力して暮らしている。

そんな風にまったりしているとき、俺の家に向かって手を振りながら、レウスレイヤーという髪型にした青年が歩いてくる。

「おーい、リーダー！アッシュさん！」（くそ、まさかジャンケンに負けて呼びに行くことになるとは…）

大きな声で俺を呼ぶこの青年の名前はカイト。赤い髪のイカした奴だ。

俺は窓から手を振りながら、雇っているアイルーに声を掛ける。

「マサムネ、お前ご自慢の『あんまん』あるか？」

キッチンの方から声だけ返ってくる。

「今丁度できましたニャ！あつつあつニャアッチー……！！！！！！」

相当熱いようだ。

「じゃあ、一つカイトにあげようか。」

そう指示を出し、俺はクエストへ行くための準備を始めた。

「リーダー、入りますよ」(やっと着いた)

玄関の外から、カイトの音がする。

「おう、いいよ。」

そう答えると、扉が内側へ開く。

「討伐依頼があるそうですよ。もうメルルと、ゴルトは酒場にいますよ。」(おお、リーダーのリオソウル防具すげえなやつぱ)

心の声といえど、誉められるのは嬉しい。

「カイト、あんまん食いながら行こうぜ。マサムネー。」

俺は鎧の紐の締めり具合を確かめながら、カイトに言葉を掛ける。

「あんまん！いただきます！」(おお！来てよかった！マサムネのあんまんって、うまいんだよね！)

俺は壁に掛けてある武器をとる。

この武器は特注品で、真・竜ノ顎を小さくし、片手剣と大剣の中程の大きさ、細さにしたものだ。

戦い方は、少し重いが片手でもできる。だが、威力を増すため両手

で構えることがよくあるので、盾は使っていない。

「あんまんニヤ。気を付けて行くニヤ。」

マサムネが皿の上に載せたあんまんを持ってきて見送りに来た。

「うまそ〜！いただきま〜す。」（う、うまそうだ〜！ツバでできた。）

「マサムネ、留守番頼むね。行ってくる。」

手（足？）を振るマサムネを後ろに、カイトと俺はあんまんを食べながら、酒場に向かった。

第二話・出発

酒場の扉を開ける。

入って右側にはテーブルが5つあり、左側にはギルドのクエスト受付のカウンターがある。建物からテーブルなどの内装にいたるまで、ほぼ木製である。

5つのテーブルの周りは人でいっぱい、今入ってきた俺に軽く手を挙げる奴もいた。

この村も多くのハンターが来るようになったものだ。酒場でのハンターの簡単な見分け方といえば、腰に剥ぎ取りナイフを携えているか否かだ。ハンターで、このナイフを持たない者はいない。

このナイフは、ハンターにとって生きていく為の大切な持ち物なのだ。

武器は他者の現在を奪う為のもの、剥ぎ取りナイフは、他者を未来への糧とする為に使う物だ。

俺も片手を挙げ返しながら、連れを探す。

大人数の場所では、皆の心の声を聞き分けることが難しくなる。なぜなら、その声が多すぎるからだ。昔はよくこれで頭痛を催していた。

「アッシュ！こっちこっち！」

甲高い声のしたほうを見ると、メリルが手を振っている。その横にはゴルトが腕を組んで、テーブルの一点を見つめている。

俺の装備はリオソウル一式。トゲのような突起もあるので、立って

話をしているハンター達にも気を使いながら、そのテーブルへ向かう。カイトも俺の後ろから、周りと挨拶を交わしながら付いてくる。目的のテーブルへつき椅子に座りながら、挨拶をする。

「お待たせ、メルル、ゴルト。遅くなつてすまない。カイトも呼びに来てくれてありがとう。」

「いいよ、アタシ達仲間じゃん。」（ほんと腰低いリーダーだなあ。）

元気よく答えたのはメルル。クック装備がピンクでかわいい、という理由から、多少の改良を加えながら、愛用し続けている。メイン武器はライトボウガン。

「いや……」

言葉少なに答えたのはゴルト。全身ギザミ装備で揃えている。あまり言葉を発しないので、怖い人と見られがちだが、仲間を思う気持ちは人一倍強く、またその戦闘技術も素晴らしく周りからも信頼されている。武器は太刀。

「いやいや、呼びに行くなんて余裕つすよ！あんまん食えたし！」先ほども紹介したカイト。軽い喋り方をする奴だが、熱い心を持っている。

装備は、ディアブロ装備一式。鎧から天に向かって突きでる、二本の捻れた角が否が応にも目立つ。武器は大剣。

「えゝっ！ずるい！マサちゃんのおんまん食べたのゝ！？アッシュ！アタシ達の分はゝ！？」

メルルがカイトの言葉に敏感に反応して、大声を上げる。

「悪いな、メルル。呼びに来てくれたカイトにお礼として上げたんだ。また今度みんなの分作ってくれるように、マサムネに言っとくからさ。」

俺は苦笑しながら答える。ちらつとゴルトの方を見ると、何やら指でVサインを作って俺に見せている。俺が不審げな顔をしていると、ゴルトが口を開いた。

「二つは…食べたい…」

恥ずかしいのか、頬が赤くなっている。

「ハハハハッ！そういうことか！それじゃマサムネに一杯作ってもらおう！」

一しきり皆で笑ったあと、カイトが今日のクエストの説明を始めた。

「とりあえず、今回のターゲットはリオレウスです。何にも書いてないので、普通の奴です、多分。んで、場所は火山。鍛冶屋のおっちゃんが鉱石掘りに行って見つけたらしいです。んなもんすかね、じゃパパッと行きますか。」

俺は一言添えることにした。

「毎日のように言うことだが、俺達人間は、人間の都合によって、モンスターを狩猟している。俺達は、戦いを楽しむ、または軽んじたりしてはならない。そのことは絶対に忘れないでくれ。」

俺の言葉に大きく頷く三人。

「じゃ、行くか！」

俺達は腰の剥ぎ取りナイフを突き出し切っ先を合わせた。

第三話・探索

火山の前で獣車から降りて、軽く屈伸をする。

獣車とは、ポポ等が引く車の総称で、定期的に各所を回っている。

「さて、と。早速行こうか。クーラードリンク飲み忘れないように！作戦としては、もちろん撃退を狙う。悪くて捕獲、最悪は討伐だ。協力して頑張ろう。」

と、俺が一声かける。俺達のいる村のハンターの規則は、

「どんな竜も撃退狙い」だ。必要以上に殺してしまうのは、自然に影響を及ぼすかもしれないからだ。

「りょーかいー！」（よし、頑張るぞー）

「了解っす！」（よし、しっかり研いである、と。）

「御意……」（うむ……気を引き締めねば。）

それぞれ武器の確認等をしながら答える。

「じゃあ、みんな固まって行動。見つけたら、メルルにペイント弾を撃ってもらって一時避難。態勢を確認して、その後に行こう。慎重に行くぞ。」

俺の言葉に、顔を見合わせながら頷き合う。

それぞれ武器を携え、立ち上がる。

「よし、出発！」

横に並んで火山の中へ入っていく。

「めっちゃ熱いっすねー！クーラーミート食っていいか!？」（暑いー、早く帰ってーよお…）

延々歩き回り、残りは火口にほど近い場所しかない。

俺もこの暑さには辟易していたので、しばし歩みを停めることにする。

火山は山に登るわけではなく、山に開いた穴の中を指す。

道中にも度々マグマが流れている場所もあるので、中はかなり暑く、更に鎧をまとっているハンターからすれば、死に至ることもあり得る。それに対処する為に考案されたのがクーラードリンク及びクーラミートである。これにより、死に至るほどの暑さも緩和される。それでも暑いものは暑い。また、周りも岩肌に囲まれ、外の景色も見えるはずもなく気分転換すらできない。

「この先にいると思うと緊張するねー…」（入ったらいるだろうか、ペイント弾撃たなきゃね）

そう言いながら、ボウガンにペイント弾を込めるメリル。

それが終わるのを見届けて、言葉は交わさず頷き合う。

この先にいるであろう、紅き雄火竜・リオレウスと一戦交える為に、歩き出した。

第四話・発見

俺達は少し出っ張った壁に張り付きながら、モンスターの様子を窺っている。

リオレウスを見つけたまではよかった。が、しかし、俺達が見つけたのは、銀色に輝くリオレウスだった。確かに、マグマの色が反射して赤っぽく見えるような気もする。まだそれだけならいい。

一番の問題は、その大きさにあった。

銀色のリオレウスの大きさは、普通のその2倍はあるだろう。普段見慣れているリオレウスの大きさとの違いが大きすぎ、遠近感が狂ってくる。

おい…誰か双眼鏡あるか…

あるっすよ…俺見ますね（なんだアレ…きいてねえぞ…!）

俺の小声での問いにカイトが小声で答える。

できるだけ音がしないように、ゆっくりとポーチから双眼鏡を取り出す。

ゆっくりと覗きこむカイト。

翼の爪は壊れてるっす…結構体も傷がある…弱ってるんすかね？

（あの鍛冶屋のオヤジ…普通見間違えるか？でかさも尋常じゃねえし）

いや…それは余りにも…軽率。アツシュ、ここは帰るべきではないか？（嫌な予感しかせぬな…私は逃げるべきだと思うが…）

俺も嫌な予感がしていた。俺達だけでは、対処できないかも知れない。
決断を下す。

一旦退こう…

俺は安全策を取った。

俺を殿にして皆モンスターに背を向け、ゆっくり歩きだす。
音をたてないよう…ゆっくりと…。

後ろを振り返るが、モンスターは気づいていない。
これなら逃げれる！

逃げられなかった。

何の因果か。

振り返った首を、前に戻すその時、近くの壁に、付けられた、採掘
跡から、拳ほどの、大きさの石が、今地面に、落ちるのを、見た。

第五話・敗北

「迎撃だ！」

俺は叫び声にも似た声を上げる。

三人も、見つかつても逃げられる相手ではないと悟り、武器を構える。リオレウスは想像を絶する速さで突進してきている。

広い場所であるとは言え、周りにはマグマが流れていたり、行動に多少の支障がある。

「でけえ！やべえ！でけえ！」（でけえ！やべえ！でけえ！）

「左右に別れる！」

俺が言うが早いか、左にカイトとメルルが、右に俺とゴルトが走り出す。

当たる寸前に前方に向かって、体を投げ出す。

翼の先が、リオソウルの頭防具をかすめる。それだけで、首ごと持って行かれるような衝撃を受け、防具はそのまま吹き飛んでいった。

「無事か！アツシュ！」（これは強すぎる…マズイ…）

ゴルトが手を差し延べてくるが、完全に脳を揺らされた俺は、その手を掴むのにも手間取る。

「こつちだ！この三下があ！カイト様をぶっ倒して見るやあ！」（こええええええ！）

左に逃げたカイトは既に体勢を立て直し、握った拳から中指を立て

たりと、リオレウスに向かって挑発している。俺がターゲットにされないように。

剣を突き、ゴルトの手を借りて、ようやく立ち上がった俺が狙われれば、簡単に殺されるだろう。

リオレウスも、その挑発の意味が分かったのだろうか。カイトの方へ体を向ける。

走り出すリオレウス。

カイトの一瞬の動きを見て、目を閉じ腕でかばう。

「閃光玉でも食えやあ！」（オツケー！入った！）

ジャストタイミング！

目を片腕でかばいながら、俺は武器を握り締め、走り出そうとする。

「閃光玉はっ……………」（よっしゃ！え…）

カイトの声が途切れる。かざしていた腕を下ろし、すぐに目を開く。

さっきまであったカイトの姿は無かった。代わりにそこにいたのは、怒りに打ち震えるリオレウス。

「カイト！！大丈夫！？」（こんな所まで！？）

ボウガンの弾を詰め直していたのだろうか。メリルがいる所は、リオレウスのいる所から20メートルは離れている。

そして確かに、メリルの目の前には、カイトがうつ伏せに倒れている。

「メリル！避ける！！」

リオレウスは、メリルに向かって火球を吐き出す。

メリルは避けなかった。いや、避けられなかったのだろうか。火球に当たる寸前、リオレウスに向かって一発の弾丸を撃つのと、火球がメリルに当たり爆発を起こしたのは、ほぼ同時だった。

メリルの撃った弾丸は、リオレウスの眉間に当たったが、簡単に地面へと転がる。

リオレウスがまたこちらに向き直り、突進してくる。

視界の隅に、ギルドに雇われたアイルー達により、連れ出されて行くカイトとメリルの姿が映る。一応は安心か…。

「アツシュ！左右だ！」（まだ避けられる！）

ゴルトの声に反応して左へ走る。が、後ろから物凄い勢いで何かが飛んできて、壁に激突する。

後ろを見た瞬間、リオレウスの尻尾が迫ってきている。本能的にその場に倒れ伏す。頭上をゴウツという重々しい音を立てながら、尻尾が通り過ぎる。

「グッ…」（体が……………動か……………ん）

ゴルトは細かく痙攣している。

振り返り、リオレウスを睨み付ける。

「き、貴様アアアア！」

俺はこちらに方向を変えている、リオレウスに向かって走り出す。リオレウスも不意を突かれたのか、噛みつくこうとする。

しかし、しっかりと踏み込めなかったのか、やけに弱い攻撃だ。難なく武器でいなす。

そのまま足下へ潜り込み、リオレウスの左足に剣を突きたてた。

リオレウスの指先が飛び、同時に血が吹き出す。次の瞬間、腹に衝撃を感じるが早いか、背中にも同等の衝撃を感じる。

なぜか言うことを聞かなくなっている体に鞭打ち、必死に顔を上げる。リオレウスはかなり遠くで吠えている。後ろを見れば、さっきまでなかったはずの壁が目の前にある。

「つよ…すぎる……」

薄れ行く意識の中で、微かに声を聞いた気がした。

（人間めが………）

第六話・岐路

銀色に光る悪魔が今にも俺に喰いつこうとしている。

俺は声にならない悲鳴をあげながら、近づいてくる口を凝視する。

そいつの口の中は真っ暗だ。

視界が真っ暗になる。その暗闇の中から、一筋の光が現れ、俺は必死に、それに手を延ばす。

「うぉあ！」

俺の手の先に見えたのは、見慣れた天井と、見慣れたアイルーだった。

「起きたニヤ！ご主人…心配したニヤ！」

ボロボロと涙をこぼしながら、鼻をすすっているマサムネ。

「マサムネ……家か……カイト達はっ！」

反射的に上体をあげようとして激痛が走り、再びベッドに倒れる。

「三人とも意識は取り戻してるニヤ。」

「そうか…」

思わず、はあっと安堵の溜め息が漏れる。

「ご、ご主人。ちょっと聞きたいことが、あるニヤ。」

聞く前から、マサムネは申し訳なさそうな顔をしている。

「どうした？なんでも言えよ、マサムネ。」

それでもしばらく、じっとベッドを見つめてから、意を決したように話し始めた。

「僕はご主人の手当てをさせてもらったニヤ。それでその…背中に二本の剣をクロスさせた焼き印を見ちゃった…ニヤ。」

俺の顔はひきつっているかも知れない。

「あ、ああ、これな！昔根性焼きみたいなのが流行って…」

「嘘ニヤ！」

余りのマサムネの剣幕に面食らい言葉を止める。

「なんで嘘言うニヤ！確かに僕はご主人に雇われたアイルーニヤ！でも雇われる方もご主人を選んでるつもりニヤ…。何があってもご主人に忠誠を誓うニヤ。…その焼き印は…^{ディーオー}DOナイトの焼き印って聞いたことあるニヤ。」

今度は俺がマサムネの言葉に対して、ベッドの一点を見つめる。できれば知られたくなかった。隠し通せろと思っていた。

「そうだよ、俺はDOナイトだ。ギルドナイトの暗殺部隊所属でありながら、ギルドのやり方に反発し、この焼き印を付けられたのさ。マサムネ、信じてほしい。俺はもうギルドの犬じゃないんだ。全てこの村の為に生きてる。信じてくれ。」

俺は下を向いた。苦虫を噛み潰したような顔をしているかも知れない。

「わかったニヤ。ご主人の生き方見てれば、信じられるニヤ。僕は誰にも言わないニヤ!」

顔を上げた俺の目に映ったのは、満面の笑みの、俺自慢のアイル―だった。

突然、扉が強く叩かれ声が掛けられる。
びっくりして急いで目の辺りを拭う。

「リーダー、酒場で会議があります。動けばぜひご出席お願いします。」（大丈夫かな…それにしても四人で行ってもダメとは…）

村人の一人だろう。扉を開けることもなく、声だけ掛けて気配は去っていく。

四苦八苦しながら、なんとかベッドから立ち上がる。

「じゃあ…ちよつと行ってくるわ。」

マサムネに手伝ってもらい、ジャージに着替える。

歩く度に痛む胸を押さえながら酒場へ向かった。

~~~~~

酒場には既に多くの人が集まっている。

俺が入ってきたのを見て、皆話をやめ、俺に注目する。

俺は皆のいる反対側。つまり、クエストの受付カウンターがあるほうに立った。木箱の壇が用意され、そこに上がる。

皆の顔を見渡してから話始める。

「えー、我々は、今回火山で希少種と言われる銀のリオレウスに遭遇した。大きさは、普通のそれと比べて、二倍以上はあったように思う。」

俺の言葉に、酒場がざわめく。咳払いを一つしてから、話を続ける。

「力も相当なものだ。俺達四人は全員……一発で倒れた……」

ざわめきが更に大きくなる。そこで、クエスト受付のカウンター嬢から、紙を渡される。軽く目を通す。

「皆、聞いてくれ！これから、4人目の瀕死者を出した為に、俺はギルド本部に弁解をしに行かなければならないみたいだ。」

今、渡された紙をヒラヒラさせながら、俺は話す。

「恐らく、銀のリオレウスがいたことも知られているだろう。とにかく、この件はこっちに任せるようにギルドには言おうと思っている。」

酒場に歓声が沸き起こる。

この村に住む一人一人の心には、『この村を作ったのはギルドではなく、俺達だ』という自負心がある。

俺だって例外ではない。

作戦は俺が帰ってきてから綿密に練ることとなり、俺は即、獣車を呼び、ギルド本部がある街を目指す。

道が…別れ始めた…

## 第七話・疑念

「じゃあ、行ってくるわ。」

頭装備のないリオソウル一式の装備を纏い、獣車に乗り込む。

見送ってくれる村人達に手を振り返す。

なんだかんだで、もう夜になっている。着くのは明日の朝か。

獣車を運転しているアイルーに、何かあればすぐ起こすように伝え、車に幌を掛けて眠りに入る。

胸が痛い。しかし、あれだけの大きさの竜と戦って負けたにも関わらず、これだけの負傷ですんだのは幸이었다。カイト達も幸い大事には至らず、骨折程度で済んでいる。

それにしても、あのリオレウス…俺達にトドメを刺さなかった。そして、最後に微かに聞こえたものは、やはりあのリオレウスの心なのだろうか。起きた時のマサムネの顔、鏡で…。

俺はいつしか眠りに落ちていた。

〳〵その頃・村では〳〵

ここは酒場。

アッシュを送り出した村人達は、また集まり飲んでいた。

「やっぱりアッシュはわかってるよ！俺達のことをさあ！」

「そりやそうだ！俺達のリーダー様だからなあ！」

「それにしても、中々アツシユみたいに無欲になるのも難しいよな！ハッハッハ！」

「確かなに！おい、そのあんた！見慣れない奴だが新入りか？まあ、あんたもそう思うだろ！？」

話を振られた男はコップを置き静かに答える。

「さて、無欲な男などいるものかな？例えばそのアツシユという男も、隠しているかも知れんな、何かを。」

話を振った男は呆氣に取られた。横から酔って赤くなったカイトが、更に顔を上気させ、男に掴みかかる。

周りからは、喧嘩を歓迎する野次が飛ぶ。

しかし、男は冷静に、それでいてよく通る声で言った。

「アツシユという男は信頼されているのか。しかし、それは彼が元ギルドナイトの暗殺部隊だったD Oナイトと知った上でのことか？ドロップアウトはしたが、ギルドの犬なのではないだろうか？さあ、どう思う？」

酒場が静まり返る。誰も一言も発しない。カイトも手を離す。

「嘘だろ、それ。あのアツシユが…」

カイトは何かを呟き続けている。それに追い討ちを掛けるように、更に男は続ける。

「なに、簡単なことだ。彼が帰って来ればわかることだ。背中にODナイトの焼き印がないか。そして、銀のリオレウスの狩猟はこの村に任せられるのか。任せられないとなれば、ギルドの直属部隊が討伐し、儲けるだろう。その儲けから金が貰えるとなれば、元犬なのだから、ギルドに尻尾を振ることも、十分ありうるのではないか？」

男は、どう判断するかは個人の自由だがな、と一言置き捨て、酒場から出ていった。

その後酒場では議論が紛糾した。

アッシュを信じよう、と言う者。

本当にアッシュはギルドの犬かも知れない、と言う者。

勿論、カイトもメリルもゴルトも、その議論に入った。

結局決まったことは、アッシュが帰って来た時に全てが分かる、ということだった。

外でその議論を聞き、急いで家に帰った一つの影があった。

「まずいニヤ…ご主人…」  
空が白み始めた。

~~~~朝・ドンドルマの街~~~~

「お客さん、着いたニヤ。」

アイルーの声に目を覚ます。

「おお、ありがとう。はい、これお代。」

ポーチからマタタビを10個取り出し、アイルーに渡す。

「毎度ニヤ」

そういつて獣車を運転して去っていく。

「さて、と。何度来ても嫌な街だ。」

俺は剣を腰に差し、ギルド本部に歩き出した。

第八話・会見

ここで、ギルドというものについて、説明しておこう。

なぜギルドというものが存在するのか。

今この国は、国王統治の王国となっている。

しかし、隣国との関係が悪い方にあるため、国軍は隣国との境界線の方に分配され、とてもじゃないが全ての村などに軍を置き、モンスターから国民の生活を守ることは困難な状況にある。

よって、民間の組織として、ギルドの経営が許可されたのだ。

依頼者はまずギルドに依頼金を払って、依頼^{クエスト}をだす。

その後、各地のハンターがそれぞれの村にあるギルド支部でクエストを受け、成功すればギルドから報酬が払われるという仕組みである。

一見すれば、国民の生活を守る良き集団である。
だが、実態は違った。

まず、一番に言えるのは、国家の役人がギルド幹部になることが多い。なぜならば、幹部は狩りには直接参加しない。しかし、給料がでる。これほどおいしい職業もないだろう。

命を賭けてハンターが戦っている時に、例え寝ていようが金が入るのだから。

二つ目は、かなり深刻な問題だ。

ギルドは方々に支部を建設しているため、情報収集能力が国家以上のものになっている。更には一部に於いては、隣国に建設されている所もある。

そつすること、何が起こるか。

国への恐喝である。

「条件を呑まねば、情報をあちらへ流す。」

と言われれば、国は従うしか無くなる。下手にギルドを潰そうとすれば、ギルドは隣国と手を組むのは目に見えている。

これは、支部が建設されている他国でもまったく同じことだった。

そして、複数の国が結束してギルドを潰そうというものは居なかった。否、いても存在を消されてきた。

その暗殺の役目を負ったのが、ギルド直属の暗殺部隊である。

高度の戦闘技術を磨き抜き、失敗も反抗も許されない。

そんな中唯一、ギルドに真っ向から反対した者で生き残っている人間がいる。

「背中に焼き印があるけどな。」

俺はそう一人ごちて、階段を上っていく。

なぜ俺を生かしているのか…辺境の村に送れば危害はないということだったのだろうか。

ガシャン！

いきなり目の前で、槍が交差される。

「貴様、何者だ！この先はギルドマスター様の執務室だ！ギルドカードを出せ！」

何を以って、ここまで尊大な態度が取れるのか。

俺は渋々ギルドカードを出す。

それを見た護衛兵の目つきが変わる。明らかに人を見下した目に。

「なんだDOか。通りたきや通れ。間違っても変な気は起こすなよ。」

「

そう言つてギルドカードを下に落とす。

俺はイラつきながらも、落とされたギルドカードを二、三回払つてからポーチにしまう。

護衛兵を後ろにしばらく登ると、かなり大きい城の扉のような物が現れる。

扉の左右にいた兵士が、レバーを回して扉を開ける。

俺は何も言わずに中に入った。

中は城のような造りの拾い場所で、扉からまっすぐの壁際に大きい机がある。

そこに到るまでの石の床には、レッドカーペットが敷かれている。

天井からはシャンデリアが何個も吊らされ、室内をまんべんなく照らしている。

その机の向こう側には、身長5メートルはあろうかという、太った一匹の生物がいる。

それがギルドマスターである。

そして、竜人族と呼ばれている、人の血に竜の血が混じっている種

族がある。その中でも、竜の血が一際濃い血統の奴らがいる。それがこのギルドマスターの一族だ。

その醜惡な生物がこちらを向く。

いつ見ても反吐がでる。

「交渉に来た。」

俺は一言目を口にした。

第九話・決裂

ギルドマスターが口を開く。

「やあ、アッシュ君。背中^だの傷の具合はいかがかね？」

余裕の笑みを浮かべている。そして、俺はこいつの心を読むことができない。竜の血が濃いからか？確かに竜の心は読み取れない。しかし、あの銀のリオレウスと戦った時の声は…。

そう考えていると、また醜悪な生物が口を開く。

「どうした、DOのアッシュ君？懐かしくて感慨に耽っているのかね？」

ニタニタした笑いを顔に貼り付け、挑発するかのよう^だに話しかけてくる。

「交渉に来た。銀のリオレウス^だのことで話がある、と紙切れが届いたものでな。」

薄気味悪い笑い声をたてながら言葉が返ってくる。

「イヒエツヒエツヒエツ、簡単よ。銀のリオレウス^だの情報を寄越し、お前の村は手を引け、わかつたな？」

一方的に決めつける発言。世界は自分の物と思っている勘違い野郎が、言いそうな言葉だ。

「おい、デブ、俺は交渉に来たと言ってるだろ？その尖った耳は、作り物か？」

その言葉を言い放つと、奴の顔がみるみる赤くなる。更に醜悪だ。どこかに暗殺部隊がいるのだろう。殺気が強くなった。

「私にそのような口答えをするのは、アッシュ君、君ぐらいしかおらん、アッシュ君。」

名前を呼ばれば、呼ばれるほど、気分が悪くなる。

「親しげに何度も呼ぶな。銀のリオレウスの狩猟は村に任せて貰いたい。金を儲けたいなら俺が10万ゼニー払おう。」

その言葉を聞いて、奴は真面目な顔付きになった。

「残念ながら問題はそこではないんだよ、アッシュ君。しかしそうだな、こちらからも条件を提示してやろう。私はお前の村のハンターが、四人がかりで負けたことに不安を抱いている。よって、ギルドに狩猟させないのであれば、不安は解消されないのです、強制的に村をギルドの統治下に置く。ギルドに狩猟させれば、村はそのままにしておいてやろう。ただし、リオレウス討伐の依頼主は『村』、依頼金は一億ゼニーだな。どうする？」

最後のほうは奴の顔は、気味の悪い笑顔になっている。

「逆らえば？」

「それならば、致し方ない。ギルドは強制的にでも介入し討伐に行

く。その際、村に竜が逃げて村を破壊するかも知れんが、それは致し方ない犠牲と言える、な、アッシュ君。」

そついった途端に奴との間に、床から防護壁がせり上がる。これで刺し違えてでも、と思っていた俺の思惑は叶わないものとなった。

「待ってくれ！」

俺がこんな決断をして許されるのか…皆に約束したことも果たせないのか…言葉が出せない。

「では、アッシュ君、せいぜい村を竜に壊されないよう」

「待てっ！分かった…狩猟してくれ……………」

自分の無力さに涙が出そうになる。しかし、ギルドと村が戦っても、村に未来はない…。

「しょうがない、アッシュ君の頼みとあつてはな。依頼金は君が頭を下げたことをもって、立て替えてあげよう。じゃあな、アッシュ君。」

笑い声が響き渡る執務室を後にし、うなだれたまま獣車を呼び、乗り込む。今昼だから、日が変わるまでには着けるだろう。

村の皆は許してくれるだろうか。一から説明すれば、きっと分かってくれるはずだ。

不安と期待を載せて、獣車はアッシュの村へ走る。

~~~~ギルド本部・執務室~~~~

一人の男がギルドマスターの前に立つ。

「マスター、なぜＤＯ如きを生かしておくのですか？我らに命じてくださればすぐにでも。」

「おお、アイルか。あのＤＯは見せしめなのだよ。ギルドに齒向かった者が、どのような悲惨な人生を送るか。しかし、ＤＯは今、英雄になりつつある。ギルドに齒向かった者が、寂れた村を発展させ、ギルドの干渉を抑えたハンター村とも言つべき物を作りつつある。これを許してはならないのだ、全てはギルドの繁栄の為に。ところでアイル、村への流言はできたのか？」

アイルと呼ばれた男は跪いて、報告する。

「仰せの通りに致しました。後はＤＯが村に到着すれば、手筈は整います。」

「そうか、ご苦勞。世界に英雄はいらないのだよ。必要なのは我がギルドだ。」

ギルドマスターの笑い声が響き渡る中、アイルは跪<sup>ず</sup>いたまま床を見つめていた。

## 第十話・決別

獣車に揺られながら、何度も不安を拭おうとする。

村の皆なら、分かってくれる。しっかり話せば大丈夫さ。きっと、きっと。

「お客さん、着いたニヤ。」

また運転手のアイルーにマタタビを払う。

村の入り口から見える酒場。どうしても俺は、足を進めることができない。

「アツシユ、皆が酒場で待っている。」（交渉は是か非か…是であつてほしいものだな。）

突然の声に、体が浮くほどに驚く。

「ああ、すぐ行くさ。」

きつと大丈夫さ。俺は足を進め、酒場に向かう。

酒場の扉の前で一旦止まり、息を吐く。意を決して、扉に手を掛け、強く押す。

中にいる全員の視線が俺に集中する。

俺は左側に立ち、皆の方を向く。

「話してくれ。」

声上がる。

「アツシュ、大丈夫だったんだろ？」

声がかかる。

俺は下を向いて床を見つめてしまった。その視界もボヤけ始める。

俺はそのまま膝を付いた。

「すまない、みんな…リオレウスの狩猟権は取られてしまった。この村の存続を取るか、リオレウスの狩猟を取るか、迫られたんだ。」

床に涙が落ち、小さなシミを作る。

「本当に…済まない…皆のプライ…」

「おい、背中見せろ！」

俺の言葉を遮って、誰かが声を上げる。顔を上げると、集団の最前列に、ゴルトとメルルとカイトがいた。その中のカイトが一步前に出て、口を開いた。

「アツシュさん、背中見せてくださいよ。」

俺は愕然とした。

なぜ？この傷を知っているのはマサムネとギルドの奴ら。マサムネが？いや、まさか。じゃあ、なぜ今背中なんだ！？

「おい！背中見せろよ！」

また集団の中から声が上がる。

俺は観念した。

ゆっくり立ち上がり無言で鎧の紐を弛める。

鎧を床に置きインナーに手を掛け、一気に脱ぐ。

もう一度集団の方を見る。

一つの大きな声が聞こえてくる。

（裏切り、裏切り、裏切り、裏切り）

なんでだよ、なんでそうなるんだよ…。

俺は後ろを向いた。

その瞬間、一つの叫び声のように心の声を聞いた。

（裏切り者め！！！！！！！！）

俺はすぐ前を向き直る。

「違うんだ！もうギルドとは関係ないんだ！！信じてくれ！！」

必死に声を張り上げる。

「いい芝居だな！それでいくら貰ってんだ！ギルドからよ！」

「くそ！散々騙しやがって！」

「言ってる！偽善者！！ギルドの犬が！！」

次々と言葉が投げられる。俺は最前列にいる三人に救いの目を向け

た。

しかし、その三人の目は冷ややかだった。

「アッシュ、幻滅だよ。」

メルルが剥ぎ取りナイフを床に投げ捨てる。

ガラッという音が響く。

俺は目を見開いた。

剥ぎ取りナイフを床に投げ捨てるということは、対する者に向かって、絶対的な拒絶を示すものだ。

「アッシュさん、俺の親はギルドナイトに殺されたんだ……」  
カイトも剥ぎ取りナイフを床に投げ捨てる。

「待ってくれ、話を聞いてくれ！なあ、ゴルト！」

「……………」

ゴルトも無言で剥ぎ取りナイフを床に投げ捨てる。

「待ってくれ！拾ってくれよ！なんでだよ！」

酒場のあちこちで剥ぎ取りナイフを捨てる音がする。

「裏切り者！」

食べ物が投げ付けられ、俺の体に当たる。

誰かが一言だけその言葉を口にした時、それは大きな波となった。

「裏切り者！」

「犬が！」

次々と食べ物投げ付けられ、俺の体に当たる。  
俺は鎧を手にした。これ以上ここにいれば最悪の事態になる。そう直感したからだ。

少しずつ出口に近づく。その時、誰かの声が上がった瞬間、また酒場に集まっている人間の心の声が、聞こえた。

「裏切り者！殺しちゃえ！！」

（殺せ！殺せ！！コロセ！！コロセ！！）

俺は出口へ走る。鎧を手に持ち、外へ飛び出す。  
前方を見ると、マサムネがこっちに走ってくる。

「来い！マサムネ！」

すぐにマサムネと合流し、空いた片手でマサムネを胸に抱く。

「ご主人…」

後ろからは、弓矢や弾が飛んできく。できるだけ狙いを定められぬように、ジグザグに走る。涙でボヤけた視界のせいで、何度もつまづきながら、それでも走り続ける。

「ぐあっ！」

右腕に弾がめり込み、背中に数本の矢が刺さる。

もう、折れている胸の痛みも、腕や背中での痛みも、感じていなかった。

た。

ただ、後ろから来る大きな殺意から逃れる為に必死だった。

村の入り口を出ても、村人達は追ってきた。

俺は無我夢中で走り続ける。

どれぐらい走ったのだろう…。

気付けば樹海に迷い込み、後ろからの追っ手もいなかった。

俺は腕からマサムネを下ろし、座り込む。

痛みより何より先に出てきたのは、涙だった。

静かな夜の樹海に、泣き声だけが響き渡った。

## 第十一話・仲間

木々の間から漏れ出る朝日の中、俺はマサムネに包帯を巻いて貰っている。

村から追い出されてから一夜。この樹海の中で、途方に暮れている。

「なあ、マサムネ。」

静かに声を掛ける。

「なんニヤ？」

包帯を巻く作業を続けながら、マサムネが答える。

「俺はこれから、何をすればいいんだろっな……」

背中で包帯を結んでいる感触がする。

「なに、言ってるニヤ！」バン！

傷の上を強く叩かれ、悶絶する俺。

「逃げながら当たったから、どれも浅い傷ニヤ！どうすればいいかニヤんで、いくらでも考えればいいニヤ！煮込み料理だってそうニヤ！やることやって、後は待つのみニヤ！まったく！しつかりするニヤ！」

猫に説教された自分を第三者が見たら、どう思うだろうか。

そんなことを想像して、少し笑ってしまう。

「マサムネ、でもな、俺にはやるべきことがなんなのか、分からないんだよ…」

目を丸くするマサムネ。

「ニャーッ！いつからそんな馬鹿になったニャー！ハンターは何をすべきニャー！？自然を保ちつつ生きるのがハンターニャー！そんなことすら忘れるニャんで。」

そういつて、地面に跪ずいて手を付き、失意のポーズを取るマサムネ。

「そうか、そうだよな。とりあえず、生きようか。」

そういつて立ち上がる。魚でも釣りに行こうか…。なんか食べなきゃ餓死するからな。

そう考えて歩き出すと、後ろから声が掛けられる。

「ご主人！」

後ろを振り向くと、頭に鍋を被り、片手に千年包丁を、片手に鍋の蓋を持ったマサムネが立っている。

「今日から僕は、食事係兼ハンターになるニャー！僕を弟子にするニャー！」

俺は、ニコニコ笑って構えるマサムネを見ながら、大きく頷いた。

「心強いな。後で稽古つけてやるからな。よし、まずは釣り行くぞ。」

食うぞ、魚。」

「はいニャー！」

俺の言葉に力強い返答をするマサムネ。

池を探す道中、マサムネは喋り続けた。

「僕はご主人の心は受け継いでるから、後は戦闘の技術だけニャー！」  
「魚はどうやって食べるニャー！調味料や道具は持って来たニャー！」

二人だけのパーティーは、賑やかに樹海を歩いた。

~~~~~

「「いったただきまゝす！」」

マサムネと声を合わせる。サシミウオの焼魚と、焼き特産キノコが今日のメニューだ。

「うまい。さすがマサムネだな。」

「それほどもあるニャー！」

冗談を言って笑っている時、視線の先の草むらが大きく揺れる。ほんの数メートルの所だ。

俺は武器を握り、口到人差し指を当てる。

ゆっくりと近付く。

あと、一メートル。

草むらの右側から影が飛び出す。俺は反射的に、剣を向けた。

そこに居たのは、14、5歳ぐらいの人間だった。

「すみません、何か食べ物下さい…」

~~~~~

ガツガツと魚とキノコを食べ続ける子供に、色々話を聞く。

「でだ、今15才で、街の孤児院から脱走、追われて逃げてたら樹海へ迷い込み、二日は食べていなかった、と。で、名前は？」

「あ、キリです。」

キリと答えた少年は、新たな焼魚に手を延ばす。

「おじさんは？」

焼魚を食べながら、今度は逆に聞き返してくる。

「お、おじ…まあいいか。俺はアッシュ。28歳だ。職業はハンター。訳あって、村から逃げて、現在に至る。」

俺の名前を聞いて、何か不審げな顔をするキリ。

「ハンター…アッシュ…ああ！秘境の村長！！孤児院で大人気だっ

た人！？す、すごい。」

キリは口の中の魚を飛ばしながら、大声を出す。

俺も顔に付いた魚片を落としながら答える。

「人気だったかは知らんが、恐らくそのアッシュだ。」

キリは食べるのを止め、目を輝かせている。そして、地面に手を付き、頭を下げる。

「僕を弟子にしてください！強くなりたいんです！」

俺は軽く呆れた。

「強くなりたいってお前…強くなって何するの？」

俺の問いに即答するキリ。

「孤児院の仲間を助け出します。」

仲間、か……俺は空を見上げる。

「分かった、それなりの所までは教えられるかも知れない。それで、いいな？」

俺の問いに元気よく答え、隠してあったのだらう片手剣を草むらから持ってきて、装備していく。

俺はこれでいいのかな、自問してみるが答えは返って来なかった。

## 第十二話・初陣

「駄目だ駄目だ！二人とも腕でしか剣を振れてないぞ！腰が引けてたら斬れないんだ！」

俺の怒号が樹海に木霊する。

今二人は倒木を切りつけている。

「なににビビって腰が引けてるんだ！お前達は！とにかく、腰入れて剣を振れ！自分の剣の重さを知れ！竜は一太刀じゃ死んでくれないからな！」

竜との戦いは長期戦になればなるほど、辛くなる。腕は痺れ、足も棒のようにな。そこで物を言うのが、日頃からの鍛錬だ。走り続けられる脚力、剣を振り続ける腕力。総合的に言えば、スタミナだ。

「師匠、ちょっと休ませてください。」

キリもマサムネも、もう腕が上がらないといった感じで、腕を垂らしている。

「よし、じゃあ休憩だ。」

その場に大の字に倒れ込む二人。

「疲れたね、マサムネ……」

「ほんとニャ……腕がだるいニャ……」

汲んでおいた水を飲む為に、立ち上がる二人。

「腰入れるってこうかな？」

「いや、こうじゃニヤいかニヤ？」

身振りで表しながら、話し合う二人。いいコンビになるかもしれない。

俺も水を取りに行き、キリに話し掛ける。

「なあ、キリ。お前、仲間を助けるために強くなるって言ったよな？」

「え、はい。」

キリはなぜまたそれを聞くのかわからない、と言った表情をする。  
俺は本心を探る為に、更に問う。

「じゃあ、孤児院の人間を殺すということか？」

一瞬、キリは驚いた表情をしたが、すぐにかぶりを振る。

「いえ、まさか。僕は強くなって金を稼いで、皆を引き取るのが一番いいと思うんです。その為には、まず強くならなきゃいけない。そう思っただけです。」

俺は驚いた。キリの言葉にではない。心の声が聞こえないのだ。いつからだ…村から追い出された時は聞こえていた。

マサムネは人間ではないから、聞こえないのは当然として…という

ことは、樹海に逃げ込んでからか。

「師匠…教えて貰えますよね？」

地面を見つめていた俺の顔の前に、キリの顔が突然現れる。

「うわっ！大丈夫だ、教えるよ。」

とにかく、どこか村に行かないと、二人の装備が足りない。

「今どこにいるか、皆目見当がつかないが、とにかく一方向に歩いて村を見つけよう。」

~~~~~

どれくらい進んだのだろうか。ただひたすらに、樹海を分け入る。武器で邪魔な蔦や、草を切り落としてつつ進んでいく。

その時不意に声がした。

（なんか人間の臭いがしやがるな…）

何の声だ？

とりあえず、後ろの二人に静かに伏せるようにジェスチャーで伝える。

（こっちから、臭ってくるな。）

ガサガサと草を踏み分ける音が聞こえる。

そつと草陰から顔を出し、様子を見る。
そこにいたのは、イヤンクックだった。

その時、野生の勘なのか、こちらを向く。急いで頭を引つ込めたが、
どうだろうか。

（今、向こうで何かが動いた…）

足音がだんだん大きくなる。俺は静かに剣を構える。二人とも俺が
構えたのを見て、それぞれの武器を握る。

「行くぞ！」

俺が声を発した瞬間、三人共草陰から飛び出した。

（ヒーツツ！ハ、ハ、ハ、ハンターだー！）

この声は本当にイヤンクックのものなのだろうか。
イヤンクックは臨戦態勢に入る、大きな耳を広げ、吠える。

「キリ、マサムネ、撃退するぞ。気合い入れろ！」

キリとマサムネの初陣が始まる。

第十三話・拒絶

俺の一声を皮切りに、戦場が動き出す。

キリとマサムネは、イヤンクックに向かって左方向へ走りだす。俺は右へと走り、振り回されたイヤンクックの尻尾をかわし、風切り音を聞きながら、すれ違い様に尻尾を斬りつける。剣と甲殻のぶつかり合う音が響き、甲殻が少し落ちる。

それでも、尻尾は勢いを殺すことなく、足を斬りつけていた二人を振り払おうと、回り続ける。

それを察知して、キリとマサムネは地面を転がり、尻尾の射程から外れる。

さっきまで剣を振るのも、うまくできなかった二人が、回避行動まで一端にできている。

若さ、野生的な勘、熟練されていけば、この二人は強くなる。そう確信できる動きをしている。

イヤンクックも翻弄され、苛ついているのか、執拗にキリとマサムネを狙う。突進し、尻尾を振り回し、大きく重い嘴を何度も振り下ろす。

その全てを軽やかにかわし、隙を見つけては、剣を叩き込む。

まだまだ大型の竜と戦うには心もとないが、それでももう、俺が教えるべきことは無いのではないだろうか、と思える程だ。

唯一つ教えなければならないのは、これだ。

俺は剣を上段に構える。

左足を軽く前に出し、重心は前に置く。右足は踵を浮かし、体は横を向け、顔はしっかりと敵を見据える。

キリとマサムネに攻撃が全く当たらなかったイヤンクツクは、狙いを俺に定め、突進してくる。

これほど落ち着いた状態での攻撃など、実戦の場では使うことはほぼ無いが、言いたいことは伝わるだろう。イヤンクツクの嘴がどんどん大きくなる。突進してきている分、前のめりになり、嘴は丁度俺の胸の高さだ。

「よく見ておけ！」

俺の射程に入った。

その瞬間、右足で地面を蹴り体全体を捻りながら、その全身の力を腕に込め、右上から左下まで袈裟斬りに斬り払う。

イヤンクツクの嘴は斜めに斬り裂かれ、血が吹き出る。

俺はそのまま左足へ力を込め、今度は左下から上方めがけ斬り上げる。

俺の剣はイヤンクツクの右目を切り裂き、鮮血を噴出させる。

イヤンクツクは悲鳴を上げ、後ずさる。

俺はイヤンクツクの左目を見つめ静かに語りかける。

「頼む、引いてくれ。殺したくないんだ。」

（わ、わかった………え？）

「……………え？」

（あんた、話せるのか…？）

俺も目が丸くなっていただろう。

「やあ！」

後ろから追いついてきたキリが、棒立ちのイャンクックを斬りつける。

イャンクックは驚き、すぐに振り向いて走って逃げた後、早々と飛び去って行った。

キリとマサムネはイャンクックの顔を見たのだろう。自分達が何回も剣撃を入れたにも関わらず、殆ど血が出なかったにも関わらず、たったの二撃であそこまで追い込んだ俺。

「二人とも、そういうことだ。大型の飛竜との戦いでは、長期戦になれば圧倒的にこちらが不利になる。それを防ぐ為には、一撃一撃を的確に力強く命中させることだ。まあ、俺もイャンクックだから今みたいな芸当ができたわけだが、この理屈は変わらない。」

俺の方を笑顔で振り返った二人は、俺の姿を見てその笑顔を消す。

「おいおい、どうしたんだよ…」

俺は苦笑しながら、頭を撫でようと手を延ばすが、二人とも一步後退る。

俺は延ばした手を握りしめた。

そのまま振り返り歩き出し、後ろにいるであろう二人に話しかける。

「怖がらせて悪いな…血に塗れたこの姿が、ハンターである俺の姿なんだよ…」

それから、俺達は何も話さず、ひたすら歩いた。

樹海を抜け出し、村を発見したころには、空には星が輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4248f/>

誰が為に剣を振る

2010年10月11日11時22分発行